

## 天眼鏡

## キューバ農業に光を観る

2月末から3月上旬にかけてキューバに足を運んできた。『200万都市が有機農業で自給できるわけ』『有機農業が国を変えた』等の書籍が出されてもいることから、都市農業や有機農業の大国とされるキューバ農業の実態に触れてみたいとの願望を長年抱いてきた。実際に足を運んでみて、残念ながら首都ハバナの市街地に農地を見かけることはほとんどなく、屋上農園に出会うこともなかった。

ソ連が崩壊した1989年以降、輸入が著しく減少して食料が大幅に不足すると同時に農薬や化学肥料もない中、一時的には街中の空き地を活用し、有機農業の手法を使って無農薬・無化学肥料で自給用の野菜生産に取り組んだことがあったことは確からしい。その後、食料事情が好転するのにもなって、農地は宅地に転用されたり、農地としての利用を取り止めたようだ。実際にハバナ市内や郊外で有機農業に取り組んでいる農家を訪問し、木枠等で囲んで客土し、たい肥と混ぜて高畝で野菜を栽培する「オルガノポニコ」や混植を積極的に活用するなどの現場を見学することはできた。しかしながら「都市農業」の定義がハバナの場合だと、「ハバナ首都圏、及びハバナ県全体」で行われる農業を指すことになっており、かなり広い地域での農業が都市農業とされている。日本での都市農業とは大きく異なり、都市農業に関する統計数値をそのまま受け止めるのは不適當であり、また有機農業についての統計もない。いずれにしても実態は、「都市農業大国」「有機農業大国」には遠く及ばないと言って差し支えなからう。

もう一方でキューバと言えば砂糖、そしてタバコを思い浮かべもする。スペインの植民地時代、アメリカへの隷属時代、さらにはカストロによる革命政権に移行して以降も、著しく砂糖生産に偏重した農業が続い

てきた。すなわち革命後も社会主義圏内での国際分業により、外貨獲得のための最大の輸出品として砂糖が位置づけられ、過半の農地にサトウキビが植えられてきた。輸出ねらいの農業が展開され、食用とする農産物は輸入に依存する偏重した構造が固定化してきた。それがソ連の崩壊にともない食料自給を高める農業構造への転換を余儀なくされ、サトウキビの生産量は大幅に縮小してきた。しかしながら農業の生産性は低く、肝心の食料の自給には程遠いというのが実情である。

こうした中で眼を見張らせられたのが、キューバの西部にあるビニャレス溪谷での馬を導入し観光と一体化させての農業の展開であった。ビニャレス溪谷は石灰岩でできた様々な形をした山々が続く奇観を呈しており、国立公園となっているが、そのふもとでは多様な農産物が栽培されるだけでなく、政府のモデル農場として支援も受けて環境にやさしい農法も取り入れられている。これらが自然とよく調和した、素晴らしい景観を形成しており、外国人をはじめとするたくさんの観光客をひきつけている。そしてこれら農園の間を走る道が整備され、馬に乗って散策することができる。その馬が実によく調教されており、はじめに簡単なたずなの操作を教えてもらうだけで乗馬初体験であってもすぐに乗ることができる。勿論、農家の人がいっしょに並走し、状況に応じて馬を誘導してくれるなど、安全性に不安はない。

キューバは観光農業に大きな潜在力を有しているが、日本も同様な能力を秘めているように感じる。これから農業は、景観、地産地消、民泊もキーワードであるとともに、馬・乗馬に大きな役割が期待できそうな気がする。

(農的社会デザイン研究所 鷲谷 栄一)